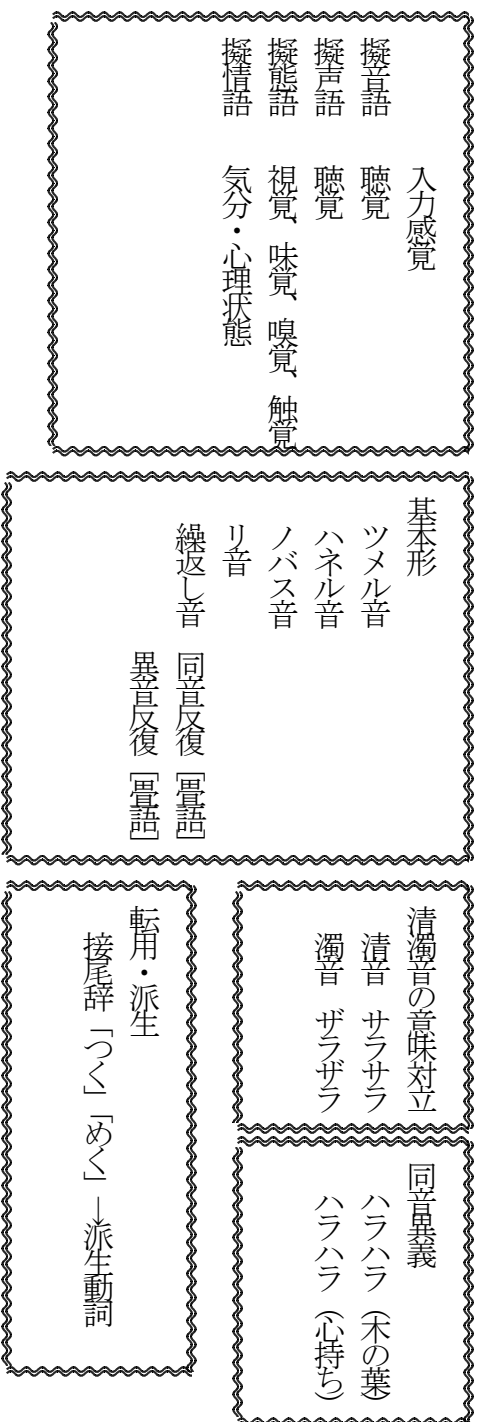


22 の講義内容 音の響きと弾みから学ぶオノマトペの活用法

象徴語（オノマトペ）【Onomatopée】

外界の物音や声などに似せた音声（社会の言語枠にあてはまる）を擬音語、擬声語と言う。
外界の動きや状態を音声（共感覚）で象徴的に表わした語を擬態語と言う。



象徴語表現の実際

現代の日本語における象徴語表現を知る文献資料として、次のA～Cの専門資料を紹介しておこう。そして、D～Fは、国語辞典のなかで、この象徴語を見るときにどのようなように捉えてきたのかを知る二次的資料としてここに紹介しておく。

《参考図書文献》

- A 『擬音語・擬態語の読本』（尚学図書・言語研究所編集、小学館刊）一一〇〇語収載
- B 『擬音語・擬態語辞典』（浅野鶴子編、角川書店刊）
- C 『^{華じし}擬音擬態語辞典』（山口仲美編、講談社刊）
- D 新編『大言海』（大槻文彦編、富山房刊）
- E 『学研国語大辞典』（金田一春彦他編、学習研究社刊）
- F 『日本国語大辞典』（小学館刊）

このA～Cの専門資料中、尤も新しく且つ斬新な内容を組み込んだCは、主編者による①から②に及ぶ擬音語・擬態語コラムが面白い。また、「はしがき」には、「国語辞典に載らない言葉」という項目を挙げて、「擬音語」というのは、現実の世界の物音や声を私たちの発音で写しとった言葉です。たとえば、「ほーほけきよ」「がたがた」。擬態語というのは、現実世界の状態を私たちの発音でいかにもそれらしく写しとった言葉です。たとえば、「べったり」「きらきら」とし、これらの象徴語は、普通の国語辞典には掲載されにくいことばであることを指摘しています。国語辞典に載っていないからそれは日本語にはないという原理を外国人の日本語研究者が主張してきたら、象徴語は日本語の蚊帳の外になりかねない。猫の鳴き声「にゃおー」や「にゃんにゃん」は……、未収載。夏目漱石の『吾

輩は猫である』の「俳句をやつてほとゝぎす」「ほとゝぎす」へ投書をしたり、新體詩を明星へ出した
り、間違ひだらけの英文をかいたり、時によると弓に凝つたり、謠を習つたり、又あるときはヴィオ
リン杯をブー／＼鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつて居らん。」のような
「ヴァイオリン」の音なども未記載となる。この理由は、

- 1, 日本人なら辞書を繙かなくてもその意味を理解している。
- 2, 生まれては消え、生まれては消えていく流行語は、掲載しないでおく。
- 3, 日本語の品位を下げることをばを掲載しないでおく。

と云つた観点から掲載を見送られてきたことばにこの象徴語が多く占めていることも慥かなことであ
る。国際化が叫ばれる昨今、「日本語を学ぶ外国人と翻訳者を悩ませる」のもこの象徴語の表現であ
ることを知っておきたい。病院で腹痛の状態を医者伝えるとき、医者が「どのような痛みですか」問
診したとき、日本人であれば「しくしく」とか「きりきり」という痛み状況を象徴語表現で医者に答
えていく。これが外国人はできにくい。では、日本人であれば、この象徴語を本當によく理解して用
いているのかといえ、これも実はそうでないことが、最近分かつてきたと云うことである。文化の
異なる人々と多くの日本人が接触することで、日本の歴史文化に根ざした象徴語を学ぼうとする気構
えがこの頃頃に芽生えてきたことも事実であるということであろう。

現代語の象徴語表現について

橋本治が、古典作品として名高い清少納言『枕草子』（作者の手になる自筆本は存在しない）を現
代語訳にして、世に問うて久しい。この作品は、研究者の現代語訳とは異なる、現代の若者が読むと
こんなことになるのかなあという発想に基づいて、「桃尻語」に訳したのである。しかし、専門の研
究資料には、萩谷朴さんの翻刻及び注釈書を用いたという曰く付きの作品でもある。ここにも、象
徴語が鏤められて展開している。

橋本 治 『桃尻語訳・枕草子』上（河出書房新社）

○いつもの筵を敷いて降りるんだけどさ、すつごくイライラして頭に来るんだけど、どうしたらいいのよッ（！）「第五段四八頁」

○イライラするもの！急ぐことがある時に来て長話する客！「第二五段一一二頁」

○空の気色「けしき」だってウラウラで、ふあんたすちつくに霞がかかっているとこにさ、「第二段一九頁」

○三月。三日は、ウラウラとのどかに照つてなくちゃ！「註：だつてお節句だもん！」「第二段二九頁」

○警蹕なんか「おーしー」って言う声が聞えるのも、ウラウラつてのどかな陽射しなんかもメツチャクチャ素敵なんだけど、最後のお膳を持つてった蔵人がやって来て、「お食事です」って申し上げればさ、内側の戸口から帝はお入りになるのね。「第二〇段・九四頁」

○狩装束や直衣なんかもすつごく素敵にして、じつと坐つてもいなくつてあっちこつちにウロウロしてるのも、すごい素敵。「第三二段一五七頁」

○・硯に髪が入つてすられてんの。あと墨ン中で石がキシキシつてきしんで鳴つてんの。「第二五段一一二頁」

○儀式の白馬を見るんでさ、一般関係者は牛車をキチンと仕立てて見に行くの。「第二段一九頁」

○キチンとした恰好してましたらさア、それでこそ驚く人もいるでしょうけれどオ……。〔第五段四九頁〕

○白い色紙をキチンと畳んでさ、「これに今すぐ思い出させる歌を一つずつ書いて」っておっしゃられるの。〔第二〇段九五頁〕

○小柄で、髪の毛はすつごくキチンとしてるのがサラサラツツとしてて少しセクシーな子が、声が素敵で緊張してものなんか言ってるのがさ、チャーミング。〔第五二段・二二二頁〕

○宮が御前の御几帳を動かして、長押の方にお出ましになるなんて、理屈抜きでただキラキラしてんのさア、お仕える方も感無量って気がするここにさア、〔第二〇段・九四頁〕

○あっちこっちキョロキョロ見たりなんかして、牛車のいい悪いをほめたりけなしたり、〔第三〇段一四一頁〕

○北の門から女房キャリアの牛車なんかも「まだ陣ガードマンがないから入っちゃおよ」って思って、ヘアーがグシャグシャな人も大していじらないで、戸口に寄せて降りるんだからって思って油断してたところさ、〔第五段四八頁〕

○余計さ、顎がゲツソリしてて可愛げのない子なんかはさ、やたら目の敵にして宮の御前でさえ悪く申し上げるのね。〔第四六段二〇四頁〕

○内裏の東の御門の敷居を曳いて通る時、頭ゴツツンコに揺れて、頭に刺してある櫛も落ちてさ、そんなつもりじゃないから、折れたりなんかして笑うのもまた素敵なのよね。〔第二段二〇頁〕

○牛飼いはね、大柄で髪の毛がゴワゴワしてるのが、赤い顔しててね、気がききそうなの。〔第五二段二一一頁〕

○小柄で、髪の毛はすつごくキチンとしてるのがサラサラツツとしてて少しセクシーな子が、声が素敵で緊張してものなんか言ってるのがさ、チャーミング。〔第五二段二二二頁〕

○みんななんとなくサワザワって笑う声、聞えたんだと思うよオ。〔第三二段一五七頁〕

○廂の間のすだれを高く上げて、長押の上段の上に乗達部は奥を向いて、ズラズラツツと坐ってらしゃるの。〔第三二段一五三頁〕

○小半蔀の御簾からもズラーツツと出てる頃よ。〔第二〇段・九四頁〕

○でつぷり肥ってるのは「眠いんだろうなア」って見えちゃうもん。〔第五二段・二二〇頁〕

○足音がしてバタバタ出て来んのをさ、上の御局の東側について耳をすまして聞いてんだけど、知ってる男の名前が出るのは、「ハッ」て、いつもの“ドキドキ”が来るみたいなのよね。〔第五三段・二二三頁〕

○婿君もさ、「なかなかやるな」ってニカーツツとしてんのに、全然驚かなくて顔がちよつと赤くなっているっていうのが、ホーント、素敵なのよオ〔第二段・二五頁〕

○・なアんてことない人間がニタニタして、ベラベラベラベラ喋ってるの！〔第二五段・一二二頁〕

○足音がしてバタバタ出て来んのをさ、上の御局の東側について耳をすまして聞いてんだけど、知ってる男の名前が出るのは、「ハッ」て、いつもの“ドキドキ”が来るみたいなのよね。〔第五三段・二二三頁〕

○なんか、フツフツ言ったらさ、その坐ってた犬がブルブル体震わせてさ、涙をメッタヤタラに落とすからさ、すつごく驚いたの。〔第六段・七四頁〕

○なんか、フツフツ言ったらさ、その坐ってた犬がブルブル体震わせてさ、涙をメッタヤタラに落とすからさ、すつごく驚いたの。〔第六段・七四頁〕

○奥へお入りになってからも、やっぱり輝いてらっしゃることなんかをベチャベチャ話してると、南の引き戸のそばの几帳の柄が突き出てるのにひっかかって、簾が少し開いているところから黒っぽいものが見えるからさ、〔第四六段・二〇六頁〕

○・なアなんてことない人間がニタニタして、**ベラベラベラ**喋ってんの！**「第二段・一二二頁」**
○「うるさい！」って手で止めるんだけど、お姫イ様がまたさ、なんにも分かんない顔をして**「ポア**
ン」としてらっしゃるの。**「第二段・一五頁」**

○あと、ホントに一つか二つなんか、ぼんやり**「ポーツ」**と光ってくのも素敵。**「第一段・一七頁」**
○**「ポーツ」**と暇な時に、「大進が“ぜひお話したい”んだって」って言う声をお聞きになって、「また
どんなことを言ってるのさ、喋れようって言うのかしら？」って宮がおっしゃられるのも、やっぱり素敵。
「第五段・五九頁」

○縫い目は切れてるし、**「ポロポロ」**になりかかっている子もいるんだけど、そんな子が履子や沓なんか
に「鼻緒上げてエ！」「裏直してエ！」なんか、持って騒いで、「早くお祭りになんないかなア……
……」って、準備に歩き回っているのもすっごく素敵だなア。**「第二段・三二頁」**

○あと、ホントに一つか二つなんか、**「ぼんやりポーツ」**と光ってくのも素敵。**「第一段・一七頁」**
○霞も霧も邪魔しない空の様子がなんとなく**「ムズムズ」**と素敵な頃にね、**「第二段・三二頁」**

○お白粉の行き渡ってないところは雪が**「ムラムラ」**に残っている感じがしてさ、すっごく見苦しくつ
て**「第二段・二〇頁」**

○雪が降って**「メチャクチャ」**凍っていると、請願書を持って歩く四位や五位の人**「第二段・二七頁」**
○宮中にいる御猫さんは殿上人げね、「命婦サマ」っていつて**「メチャクチャ」**素敵だったんで帝も大
切にさせてもらっちゃったのがね、端近に出て寝そべっているもんだからさ、**「第六段・七〇頁」**

○「あーあ……、**「メチャクチャ」**堂々と歩き回ったのになア……」**「第六段・七二頁」**

○**「メチャクチャ」**に腫れ上がってみともなくなっている犬の苦しそうなのがさ、**「第六段・七三頁」**
○あたし見てさ、「あーあ、昨日翁丸を**「メチャクチャ」**にぶっちゃったんだなア……」**「第六段・七
四頁」**

○宮の御鏡を置いてさ、「じゃ、翁丸なのね？」って言うと、頭下げて**「メチャクチャ」**鳴くの。**「第六
段・七四頁」**

○宮も**「メチャクチャ」**安心してお笑いになるの。**「第六段・七四頁」**

○高欄こゝろかきのところこゝろに青磁の花瓶の大きいのを置いて、桜の**「メチャクチャ」**素敵な枝の五尺ぐらいのものを
すーごく一杯挿しといたらさ、高欄の外にまで咲きこぼれちゃっている昼の頃ね。**「第二〇段・九三
頁」**

○なんか、**「ブツブツ」**言ったらさ、その坐ってた犬がブルブル体震わせてさ、涙を**「メツタヤタラ」**に
落とすからさ、すっごく驚いたの。**「第六段・七四頁」**

○命中しちゃうのは**「メツチャクチャ」**おもしろいし、大笑いしているのは、すっごく陽気ね。**「第二
段・二五頁」**

○**「メツチャクチャ」**、おかしイッ！**「第五段・五四頁」**

○頭持ち上げてそっち見て、**「メツチャクチャ」**笑うの。**「第五段・五五頁」**

○犬が**「メツチャクチャ」**鳴く声こゝろがするからさ、「どこの犬がこんなにいつまでも鳴いているんだらう？」
って聞いているとき、迎山な数の犬が様子を見に走ってくるのね。**「第六段・七二頁」**

○警蹕けいすいなんか「おーしー」って言う声こゝろが聞えるのも、ウラウラうらうらってのどかな陽射しなんかも**「メツ
チャクチャ」**素敵なんだけど、最後のお膳を持ってた蔵人がやって来て、「お食事です」って申し
上げればさ、内側の戸口から帝はお入りになるのね。**「第二〇段・九四頁」**

○朝御飯の席に帝がいらしゃってさ、御覧になって、**「メツチャクツチャ」**に驚かれたのオ。**「第六段
・七〇頁」**

○御簾みすだの中じや、女房にようぼう達は桜の唐衣からぎなんかを**「ゆー」**たりとくつろげて垂らしてね、藤 や山吹なん
か、感じかんじいいのがいーっぱい**「第二〇段・九四頁」**

○ヨタヨタ歩いてるから、「翁丸なの？今時分こんな犬が歩いてやしないわよねエ……」って言うんだけど、「翁丸！」って言っても聞きやしないのね。〔第六段・七三頁〕

○御厨子所の御膳棚に沓置いてき、ワイワイ問題になつてゐるのをすっごいノツちやてね、〔第五三段・二一三頁〕

○新しく通つて来る婿の君なんかが宮中へ御出勤する頃をさ、ワクワクしてて〔第二段・二五頁〕

○「こないだの夜」のことなら言っちゃおうかなア……」ってワクワクはしたんだけどさ、〔第五段・五九頁〕

〔近代〕 明治時代以降の象徴語について

二葉亭四迷『平凡』（新潮文庫）

○その度にリボンが飄々〔ひらひら〕と一緒に揺く。〔三十八・八八頁〕

○何でも赤い模様や黄ろい形が雜然〔ごちゃごちゃ〕と付いた華美な襦袢の袖口から、少し紅味を帯びた、白い、滑こそうな、柔らかそうな腕が時とすると、二の腕まで露われて、も少し持上げたら腋の下が見えそうだと、気を揉んでいる中に、又旧の位置に戻つて了う。〔三十八・八九頁〕

○雪江さんは処女だけれど、乳の処がふっくりと持上がっている。〔三十八・八九頁〕

○いつしか私は現実を離れて、恍惚〔うつとり〕となつて、雪江さんが何だか私の……妻でもない、情人でもない……〔三十八・八九頁〕

○私が着物を脱ぐと、雪江さんが後からフワリと寝衣を着せてくれる。〔三十八・八九頁〕

○む、む、寒いなあとか私も言つて、急いで帯をグルグルと巻いて床へ潜り込む。〔三十八・八九頁〕

頁〕

○あいといつて雪江さんが私の面を見て微笑〔にっこり〕する……〔三十八・八九頁〕

○唯相手のない恋で、相手を失つて彷徨〔うろろう〕している恋で、その本体はやっぱり満足を求めて得ぬ性慾だ。〔三十八・九六頁〕

○何だか領元がらぞくぞくする程嬉しい。〔三十七・八六頁〕

○こうなると松陰先生崇拜の私もカタガタと震い出した。〔三十五・八一頁〕

○大きな、笑うと目元に小皺の寄る、豊類〔ふっくり〕した如何にも愛嬌のある円顔で、形も大柄だったが、何か円味が有り、心もその通り角が無かった。〔三・一〇頁〕

○成る程折々母が物蔭で泣いていると、いつも元氣な父がその時ばかりは困つた顔をして何か密々〔ひそひそ〕言っているのを、子供心にも不審に思つた事があつたが、それが伯父の謂うお祖母さんに泣かされていたのだったかも知れぬ。〔三・一一頁〕

その他（漢字表記の語）

○茸々〔もじやもじや〕〔十七・三九頁〕，○譟然〔がやがや〕〔十七・三九頁〕，○続々〔ぞろぞろ〕〔十七・四〇頁〕，○紛々〔ごたごた〕〔十七・四〇頁〕，○狐鼠々々〔こそこそ〕〔十七・四三頁〕，○莞爾〔にっこり〕〔十九・四五頁〕，○飄然〔ひらり〕〔十九・六五頁〕，○滾々〔どくどく〕〔十一・二七頁〕，○昏昏〔うとうと〕〔十一・二七頁〕，○勃勃〔むらむら〕〔八・二二頁〕，○蹶然〔まざまざ〕〔八・二二頁〕，○混雜〔ごたごた〕〔七・一九頁〕，○喧〔きやんきやん〕〔十・二五頁〕，○莞爾々々〔にこにこ〕〔十四・三三頁〕，○苦笑〔にやり〕〔五十・一一六頁〕，○漫然〔ぶらぶら〕〔五十八・一三四頁〕，○恟々〔おどおど〕〔六・一七頁〕，

その他（カタカナ表記の語）

○ゴウ、スウスウ、ゴウスウゴウスウ、ゴウゴウスウスウ、《麩の音》「十・二五頁」○バタリバタリ（足の音）「三十七・八五頁」○ボシヤボシヤ（水の音）「三十七・八五頁」○キャンキャン（小犬の啼き声）「十・二五頁」○チリリリリン（ベルの音）「五十四・一二五頁」○ヤッサモッサ「二一・四九頁」

その他（ひらがな表記の語）

○うろうろ、○むくむく、○ぽつちり、○ほくほく

尾崎紅葉『多情多恨』における象徴語表現

—『多情多恨』（岩波文庫を使用）（一八六九年）—

※象徴語【漢字表記】用例「頁数・行数」の順に記載して示す。

きつ【屹】 恁云ふ心地で一月も居つたら僕は屹と病氣をする、前編一九⑮
ぐい【呷】 餘れる酒を又一息に呷と飲むで、前編九④
そつ【窃】 葉山は突立つたまゝ其花を昵と視てみたが、白縮緬の衿巻の端を引出して、窃と目を拭いて、其花入を柳之助の枕頭に直して、前編三五⑥
ぢつ【昵】 葉山は突立つたまゝ其花を昵と視てみたが、白縮緬の衿巻の端を引出して、窃と目を拭いて、其花入を柳之助の枕頭に直して、前編三五⑥
どつ【・】 その蹻音と俱に一陣の風は・と梢を鳴して、前編八③
ふつ【弗】 主は弗と目を開いて、前編一〇⑬
ぶん【芬】 と綾絹の白い手巾を火燵の上に出せば、芬と香水が匂ふ。前編一六⑮

ほう【*】 耐まりかねて柳之助は水でも飲むやうに一盃の麥酒を盡して、ほうと息を吐く。前編九⑩
ぞつ【悚然】 本箱の上の山茶花に目が着く、葉山は悚然として寒くなつた。前編三五④
ぼん【劈然】 一思に劈然と皿の縁へ打着ける。前編二三⑪
むつ【・然】 すると、「類さん」の・然とした面影が胸に浮むのである。前編一八②
ぴく【蠢然】 葉山は怵へかねて、「類さんに生寫」と打明した所で、成程と横手を拍れる豫想が、蠢然とも爲ぬのみか、「類さんに」と呆られて、後編二二⑧
そよ【習々】 夜露のそらは殊更朗に、澄徹るばかりで、習々との風も無ければ、暖さも暖い。前編三五⑫

ぎよつ【慄然】 葉山は慄然としたのである。前編二七②
きりつ【氣凜】 氣凜と雨具に身を固めた車夫が背面になつて、前桐油を外してゐる。前編一三⑭
せつせ【精々】 お種は精々と支度をして、やう／＼湯を注す段になつた。前編三七⑩
すらり【緋削】 葉山の内眷と云ふのは、美人ではないが、目鼻立の揃つた、色白の身材の緋削とした、閑雅な、奥様らしい様子の人物。前編三一①

うつとり【・然】 多くは物を思ふやうな態で、・然としている。前編一〇⑫
すつぽり【全然】 葉山は霜降の厚羅紗の外套を着て、全然と頭巾を被つて、前編一四③
ぼんやり【惘然】 何と云ふ事は無しに惘然・してゐる。前編八⑦
ぼんやり【・然】 柳之助は・然した顔の、氣の無い聲で、前編一四⑦
ぼんやり【漠然】 深切にも言ひ、推しても了簡を聞いたけれど、漠然とした挨拶ばかりで、竟に要領を得ずに了つた。後編一八⑥②

しよんぼり【悄然】 葉山は悄然と火燵櫓に倚懸つてゐた。前編三三⑬
いそ／＼【急遽】 と老婢は急遽起ちかゝつて外套を脱がせる。前編一四⑦

ぐづ／＼【*々】後で又悪いと氣が着いたのなら、此で*々言つて居ずと、先方へ行つて悔つて來るのが早手廻だ。後編一九一①

せか／＼【焦躁】焦躁しながら考事をしてゐる眼色。前編一二⑭

つや／＼【潤澤】今髪結を返したと云ふ、潤澤と水の垂れさうな圓鬘の首を据ゑて、火鉢の火をば見に來たのであるが、獨り笑つてゐるのが訝しさに、目も放さず夫の様子を視てゐる。前編三七①

くよ／＼【怏々】だから、餘り然う怏々思はないが可いと云ふのさ。」前編二三②< 疊字訓【・々】

>

しい／＼【凝々】葉山は之を櫓の上で好いやうに鹽梅するのを凝々と視てゐたが、前編二三⑭

しみ／＼【浸々】餘り愚痴とは思ひながら、浸々哀に搔口説かれて、葉山も誘はれ氣味の稍胸逼る。

前編二六④

しを／＼【悄々】子供が言い聞かされたやうに、柳之助は悄々と頷いた。前編一一⑰

す／＼【悄々】と調子の外れた顔をして、柳之助は悄々座に復つたが、座るか座らぬかに、「ぢや

又、……お大事に爲さい。」後編一八〇⑭

どく／＼【滾々】滾々と出る酒を見ながら葉山は少しく笑を帯びて、前編二二⑪

どんどん【滔々】軽い内に滔々薬を飲ましたら、何でもなかつたです。後編一七九⑩

のこ／＼【・踰】旦那殿が・踰御使者に立つて、今日は君種々御馳走が出来るよ、も罪が無くて可笑

しがつた。前編三四③

< 疊字訓【・々】ひとりぼっちで行き、歩の進まないさま。>

のこ／＼【・々】此御帳面に留められた奴が、其次に・々行かうものなら惨憺！前編一八三⑧

はら／＼【悚々】眞に一時の御様子では、御病氣にでもお成なさりはしまいか、と私は悚々いたして

居りました。」後編一八九④

びし／＼【犇々】母親は辨舌爽快、柳之助は口不調法と云ふのであるから、犇々言捲られて、ぐうの

音も出なかつた。

後編一八七⑦

ほろ／＼【點々】老婢は忽ち點々と涙を零した。前編八⑫

まざ／＼【頭然】その可愛い可愛い妻の類子が頭然と生きてゐるのである。前編五⑦

ふん／＼【紛々】唯其事が紛々と胸に集る。前編七⑦

くびり／＼【*】其後は柳之助が何と言はうが、見向きもせず、くびり／＼と獨飲むのである。前

編二七⑬

じろり／＼【*】俯いてゐるのをじろり／＼と視て、前編一六⑧

しよぼ／＼【肅々】時雨は肅々と、黒い風の隙洩るにつれて、身顫の出るほど寂寥は外から逼つて來

る。三三⑬

ぞくり／＼【肅々】襟元から肅々と惡寒くなるのに、前編八⑥

ぼたり／＼【滴々】柳之助は又其を見たとコップを持つたまゝ俯いて、滴々と涙を落す。前編八⑬

じつ【熟】葉山は寝転びながら其湯呑を受取つて、熟と考へてをる躰でたつたが、前編三七⑭

ひよい【・然】此語を聞くと齊しく葉山は・然と首を擧げた。

ひよい

「検討課題 1」

尾崎紅葉自身、作品を形成する以前に「疊字訓」なるノートを作成し、今このノートは東京都立中央図書館加賀文庫「図書番号九九六四」に所蔵されている。この「疊字訓」が彼の代表作である『多情多恨』（岩波文庫）のなかでどのように活用されているのかを考察してみることが試みては如何だ

ろうか。

文字色と符号にてこれを示す。

- ① 赤色は置字訓と合致することを示す。
- ② 青色は置字訓と漢字表記が異なることを示す。
- ③ 紫色は補助漢字にない漢字であることを示す。
- ④ *印は漢字表記がなされていないことを示す。

次に尾崎紅葉の他作品との比較検討として、彼の代表作である『金色夜叉』（新潮文庫）をもって象徴語表現の収録表記状態を分析を試みる。

《実例》

☆ヨウヨウ【揺々】

ゆらゆら【揺々】揺々と町の盡頭を横切りて失せぬ。前編八⑦

☆ボウダ【滂沱】②涙や血などの盛んに流れ落ちるさま。「詩経、陳風、沢陂」

繁き涙は滂沱と頬を伝ひて零れぬ。後編二七七⑰

☆モウジヨウ【蒙茸】物の乱れるさま。蒙戎。「史記、晋世家」

むしやくしや【蒙茸】「さやうでございますよ、年紀四十ばかりの蒙茸と髭髯の生えた、身材の高い、剛い顔の、全て壮士みたやうな風体をしてお在でした」続三一五⑨

さらに、近代文学から現代文学にあつて、尾崎紅葉の「置字訓」を含めた象徴語表現の漢字表記はどのように変遷してきているのかをも考察してみることも試みてみると良いであろう。方法としては現在市販されている『擬音語・擬態語辞典』に記載されている収録語の状態を対象にして見てみると面白い。

「検討課題2」

次の漱石作品に於ける象徴語表現をもって、実際に上記Cでの引用態度を考察してみよう。

夏目漱石『吾輩は猫である』（底本「新選名著復刻全集・近代文学館『吾輩ハ猫デアル』財

団法人 日本近代文学館）

〈作業事例〉

● 何ても暗薄いじめじめした所でニャー／＼泣いて居た事丈は記憶して居る。

「にゃーにゃー」猫の鳴き声。「にゃんにゃんよりもか細い声。」《用例》 現代、猫の声としても最も一般的なのは、「にゃんにゃん」であるが、江戸時代では、「にゃーにゃー」がその代表「ふところにて猫ニャアとなく。『なんだニャアだ。：あんまりおさだまりだ』（『浮世床』ある。「にゃー」の声が当時の決まりきった猫の声であった。（山口仲美）〔354頁〕

「にゃんにゃん」猫の鳴き声を写す語。現在最も一般的な猫の声。犬の「わんわん」に並び称せられる。『わんわん』『にゃんにゃん』とにぎやかな鳴き声が今にも聞こえてきそうだ」（朝日新聞00・12・10）。童謡や流行歌にも頻出する。童謡「犬のおまわりさん」でも、犬の声の「わんわん わわん」に対して、猫の声は、「にゃんにゃん にゃにゃん」。猫の声を「にゃんにゃん」と写すようになったのは、「オオ可愛やと猫撫声。にゃんにゃん甘える女猫の声」（『大経師昔暦』）のごとくである。ただし、江戸時代では猫の声としては「にゃーにゃー」の方がより一般的。「にゃんにゃん」は、女性を連想させるような特殊な場面で使われることが多い。

時代を遡った平安時代では、猫の声は、「ねうねう」（『源氏物語』）と記されている。「ん」の表記が確定していなかったために「う」で記されているが、実際の発音は、「ねんねん」であったと推測される。「寝ん寝ん（寝よう寝よう）」の意味に掛けて聞かれている。江戸時代になっても、「によう」と写し、「寝よう」の意味に聞く猫の声の流れがある。

◇類義語「にゃん」「にやごにやご」「にやごにやご」「にやごにやご」

「にゃん」は、「にゃんにゃん」と違って、一回限りの鳴き声。「にやごにやご」「にやごにやご」にやごー」「にやごにやご」は、「にゃんにゃん」よりも切羽詰まった声を表し、訴えかける力が強い。◆参考 飼い猫は、奈良時代に大陸から渡来した。平安時代になると、天皇をはじめ貴族たちは、中国から渡来した唐猫を愛育している。その可愛がり方は波通りではなく、猫が子を産めば祝賀パーティまで催すほどであった。（山口仲美）

○第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつる／＼して丸で薬罐だ。○そうして其穴の中から時々ふう／＼と烟を吹く。○果てな何でも容子が可笑いと、のそ／＼這ひ出して見ると非常に痛い。○又あるときはバイオリン杯をブー／＼鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつて居らん。○其内池の上をさら／＼と風が渡つて日が暮れかゝる。○身内の筋肉はむづ／＼する。○どうせ主人の豫定は打ち壊はしたのだから、序に裏へ行つて用を足さうと思つてのそ／＼這ひ出した。僅かに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛げかけて、きら／＼する柔毛の間より、眼に見えぬ炎でも燃え出づる様に思はれた。○吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して餘念もなく眺めて居ると、靜かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘つてばら／＼と二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。○けれども事實は事實で詐る譯には行かないから、吾輩は「實はとらう／＼」と思つてまだ捕らない」と答へた。○黒は彼の鼻の先からぴんと突張つて居る長い髭をびり／＼と震はせて非常に笑つた。○元來黒は自慢をする丈にどこか足りない所があつて、彼の氣焰を感じた様に咽喉をころ／＼鳴らして謹聽して居れば甚だ御し易い猫である。○「なに其時や別の本と間違へたとか何とか云ふ許りさ」と云つてけら／＼笑つて居る。

【検討課題3】

次の幸田文『黒い裾』に見える象徴語を最初の表に順つて、それぞれ分類してみよう。

幸田 文『黒い裾』（新潮文庫）

○ふと聞えて来る割れ声は私の神経にざらつと触り、またあれがいるなど意識させられた。「姦声二三頁」

○蔵で働くものは又、びりんとしたものをもっていた。「姦声二四頁」

○火鉢の向う側の主人の座蒲団を、ずっと後へ押しつけて坐ると、ぱりぱりと袋を裂いた。「姦声三〇頁」

○小さくちぎつてたべているうちはまだしも、わんぐり食いつくと口の端に赤いぬらぬらがみゆつとはみ出し、それにかまわずぐんと食い切つて、くちやくちややりながら舌は悠々とその辺を舐めずつた。「姦声二〇頁」

○一人でざつさとたべるだけたべ、残りはくるくると包み、ことわりもなく茶棚を明けると、がしやがしやと押しこんだ。「姦声三〇頁」

○自分にもわかるほど怒りがどつどつと浪うった。「姦声三一頁」

○「お茶を一杯飲んで下さい」としゃあしゃあして、鼈甲に金でイニシアルを置いたケースをばくとあけて、中はバットである。「姦声二二頁」

○やけに熱い筈のお茶をちつとも感じないらしく、「ごくりごくりと飲む。「姦声二二頁」

○書は遅渋を貴ぶと父に教えられたことがふと思ひ出された。「姦声二二頁」

○無言で伏し眼になった私をどう思ったのか、彼は慌てて没落の悲運をくどくどと慰めたが、結局云わんとするとところは、いかに自分が実力ある男かという宣伝であった。「姦声二二頁」

○「何だと訊くようじやいよいよ重い。おまえの心が居しかつてるから物が滞る。水の流れるようにさらさらしなくちやいけない。」「姦声三二頁」

○もつと具体的に訊いてみたい話だったけれども、さらさら流れる話をしつこく訊くことはできなかった。「姦声二二頁」

○間もなく私はさらさら流れるものを身边に汲み知った。「姦声二二頁」

○下町の女には貴賤さまざまにさらさら流れるものがある。「姦声二二頁」

○ゆく水の何にとどまる海苔の味というべき香ばしいものであった。さらりと受けさらりと流す、鋭利な思考と敏活な才智は底深く隠されていて、流れをはばむことは万ない。「姦声二二頁」

○俄仕込の流水式なんぞあつてもなくても、彼がごろた石の如くでかんとしていることに変りはなかった。「姦声二二頁」

○明らかに嫌われていると知つていながら彼は繁々やつて来た。「姦声三三頁」

○それで私にびりびり感じられるのは、彼が私をぶっこわしたがつていていることだった。「姦声三三頁」

○心身ともに現在から少しでも上に這い上がりたく、米に追いまわされ、遅渋と流水との間をまごしながら私は、きつぱりした拒絶はいろんな拒絶の方法のうちでも品位の最高なるものだと思

いこんでいた。「姦声三三頁」

○ぬつとはいって来た彼は、びつくりするような顔をしていた。「姦声三三頁」

○「あいつら、こんだ出つくわしたら最後、車の下へ呑んでやる。おれが運転手だつてことを忘れやがつて、畜生、ぐうとこう。」「姦声三三頁」

○鏡のなかの厚い胸とむくれあがつた頬が、ぐうつと私の上へのしかかつたような錯覚を起させた。「姦声三三頁」

○その後何事も起らずに痣は吸収し、彼はけろつとその話に二度触れなかった。「姦声三四頁」

○帰途家近くで、久しく会わなかつた従兄にぽつたり出会つた。「姦声三四頁」

○と、だしぬけに感覚を断ち切つて。一ツ雷のような名状できない音が、わ、わ、わんと耳を痺れさせた。「姦声三四頁」

○車はバックして、さつさと走り去つて云つた。「姦声三四頁」

○店には十五になる少女がいたし、著たなりで横になつてとろとろしていた。「姦声三五頁」

○あがつて来たのは夫でなく少女で、いま運転手が来たがお風邪だと云つて返しましたと報告した。ほつとした「姦声三五頁」

○待つ心は夫だと思ひこんでいたから、錠をさす筈だがなと聴く耳へ、どきつと割れ声が入つた。「姦声三五頁」

○咄嗟にそれを思つて、こちらから出て行くが得策だと立上ると、頭がぼんやりしていた。「姦声三五頁」

○「人にいられると思うとゆつくり休まらないから、帰つてもらつたほうが勝手なんです。うちももう戻る時間だし。」しつこく帰れと私は迫つた。「姦声三五頁」

○彼は立つたままの私を見あげ、わたしはすでにびりびりしながらはつきり見おろしていたが、無

視してあくびと伸びをし、立ちあがりさま無遠慮に、「ああ酔った酔った」と息を吐いた。「姦声三六頁」

○気味の悪さに**むかむか**してもし寄って来られたらとそればかりが気になって、そのときは表へ飛び出そうと要慎に私はガラス戸のほうへ動いた。「姦声二六頁」

○「一杯呑んだら睡くなちゃった」と云って、**ぼりぼり**頭を搔いていた彼は、**ふつ**と身をかえすといきなり、**ととと**と梯子をあがってしまった。「姦声二六頁」

○二階では**どしん**と寝ころがる音がした。「姦声二六頁」

○見るより早く、**ぺつ**と引つ剥いだ掻巻が私の手にあった。「姦声二六頁」

○向うはてれた薄笑いをし、案外おとなしく起きあがり、バンドの金具を**きらり**とさせてズボンをゆすり上げた「姦声三七頁」

○**ざつ**と寄られ、まむきに胸がくっついていた。「姦声三七頁」

○**びたつ**と相手の胸に重みを沈めると、胸から男の鼓動が**がぶり**と伝った。「姦声三七頁」

○シーツの木綿に爪先の力を与え、**じりじり**とのしあがって締めて行くと、さすがに苦しがつて**ぎ**

よろりと目を剥いた。「姦声三七頁」

○**ぎよろり**と眼を剥かれても私は罪の意識も何もなく、恐ろしくもなんともなく手に力を入れていた。「姦声二七頁」

○悲しいことに私は左右の握力が**うん**と違っていた。「姦声二八頁」

○私の拇指は乏しい握力の限りを、相手の唇の中へ突きこんでねじろうとした。**ぬるぬる**していた。

「姦声三八頁」

○半ズボンをとめる留め金が、**ぎしぎし**膝にこたえた。「姦声二八頁」

○彼の薄い毛糸のジャケツは手応えなく伸縮して彼に忠実であり、私の著物は情らし手応えを残し

はするけれど、淫奔に**ずるずる**と崩れた。「姦声二八頁」

○**ちらつ**と向うのズボンがずり落ちかけていることを見た。「姦声二九頁」

○それからだった。ひた闘いにたたかった。物が**がらがら**と落ちた。「姦声二九頁」

○歯も爪も**ぎしぎし**して、**むちゃくちゃ**に抵抗した。「姦声二九頁」

○腕が捻「ね」じ上げられて、**ふつ、ふつ**と息がちぎれる痛さだった。「姦声二九頁」

○彼が私を棄てて、**すつ**と立った。「姦声二九頁」

○半ズボンが膝のびじょうまで裏がえしになって落ちてい、それを**すつ**とたくしあげると悠々と無言で出て行った、狭い入口に立った夫と**すれすれ**に通って。「姦声二九頁」

○私はすわったが、髪は**ざんばら**であり、姿は全裸よりすさまじかった。「姦声二九頁」

○それにあの少女は！「私、はじめ泣いちゃったんです。それから**ほんやり**見ていたんです」と。

「姦声四〇頁」

その他

○ちやりんちやりん、**かつかつか**、**わっしよいわっしよいつ**。**くるつ**と往来へ走るや、「かしらあ、

金ちやあん、火事だあ、見てくんろよう！」「糞土の牆一一二頁」

○百舌鳥が裸の銀杏のてっぺんで、**ちいちい**と啼いていた。「糞土の牆一一二頁」

○**どつ**と下す風の一トふき静まるあとに、**からから**と乾いた落葉の群れがころがるのが聞える。一夜にして木々は**よきり**裸だった。「糞土の牆一一二頁」